



昭和42年(1967年)

9月号 (No. 267)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

山登りの人造り……故 石黒清蔵……	1
紀行 大高山から小倉へ……中村 謙……	3
海外便り	
アラスカ未登峰の登頂……津田周二……	2
国際アルピニスト集会……植村直巳……	7
同会に参加して……伊藤頌司……	10
Canadian Rocky 便り	
今井雄二・今井喜美子……	6
ボリビア婦人親善隊……関田美智子……	7
Cashan Oeste 登頂……A. Carter……	7
ワイワシュ便り……白後会……	8
徳島島便り……小方全弘……	8
Santa Cruz Norte ……横地康生……	12
NZ 便り……秋田しおみ……	11
お知らせ	
第8回登山技術講習会(2)	
日印合同婦人ヒマラヤ登山(11)	
第10回紅葉会・梓会(11)	
蔵王清溪小屋の記……横田敦……	9
第10回有志閑談会……古沢 肇……	13
ソ連高峰登山記録……田村俊介……	4
主な海外登山・VI(1967) ……	11
図書紹介	
ネパール・ヒマラヤ探検記録 ……	13
会務報告 ……	14
新入会員、会員異動 ……	15
絵画の寄贈 ……	2

× × ×

第三五回小集会

▽とき 九月二七日(水) 18時30分

▽ところ 本会集会室

「ブーテンの旅」金井弘夫氏
今月の小集会は、去る七月末に帰国した東大第三次インド植物調査隊の金井弘夫氏をお招きして、ブーテンの高山植物を中心にお話しを聞く会です。ブーテンの山と珍らしい高山植物のカラーイラストにご期待下さい。

婦人懇談会例会(三水会)

▽とき 九月二〇日(水) 18時30分

▽ところ 本会集会室

夏山で撮影した写真・カラースライド等を持ち寄って、皆様と夏の山行を語り合う会といたします。

第三六回現地小集会

▽とき 十月七日(土) 八日(日)

▽現地集合 十月七日午後四・三〇分

▽文部省登山研修所(立山千寿原)

本会富山支部創立二〇周年を記念して開催します。左記のよう、講演会懇親会、山行等、盛り沢山の行事を計画いたしました。多数ご参加下さい。

なお、詳細は本会または各支部へ。
◎講演会 横有恒氏ほか◎懇親会 戦前活躍した声のガイドを聞く。
○山行(十月八日)◎立山トンネル工事見学◎立山往復◎黒四ダム大町◎他に十月十日(祝)までの三日間に亘る山行。雄山一内蔵助平一黒部一太町。雄山一別山一銀岳一室堂。雄山一別山一立山一パン島。ほか。

▽会費 一、〇〇〇円(十月七日の宿泊費と懇親会費用)

▽申込み 九月三日迄に富山支部(富山市白銀町二五若林商店内)へ。

訂正「山」七月号のお知らせ欄中第二三五回現地小集会は、第二三六回

現地小集会と訂正します。(関 口)

◇山登りの人造り◇

富山 石黒 清蔵 (六三三)

表題は、「山登りと、人造り」とした方がよかったかも知れない。ところどころ、富山のことが出てくるのは目をつぶってやって下さい。

・自信とは

わかり切ったことや、人のあとを追って歩くことばかりでは、何の進歩も自信も生れない。山へ行くことと言えば、ひかたがった橋桁もない吊橋、着氷のカッティング、もう三〇cm、五cmで届くスラブ、三〇〇m、四〇〇mのナイフ・リッジで膏汗を流した果ての登頂、これらの苦勞の挙句に自信は生れる。

NHK、大新聞、総合雑誌で、自分の所説が取り上げられる、或いは変わったところで選挙で自分が支

持されて勝つ、等は男児の本懐であり、大いに自信をつける。

総じて凡人では、苦勞の分量と自信とは、ほぼ正比例すると思う。

・教育制度と先生に一言

現在の教育制度については、功罪賛否様々であるが、新に受験中心の荒廃した教育には非難の声が高い。荒廃した教育を正し、教育に創造的活動力をとり戻すにはどうする。

人間の創意こそ、文化、経済発展の原動力であるとする哲学によつて、個々人の創造的エネルギーを発揮するように、変化する社会——学校で習うこと位、五年か十年で、まるで変つてしまふ世の中にあって必要な適応力、判断力、そして最も不撓不屈の精神を持った若者を作るには、学校教育だけに頼らず、先生が自分の躰をかけた「山登り」などで学生、生徒を指導する。一寸現実離れはし

ているか知れないが、私自らは試験上の可能であると信じている。

一世を風靡する様な学風、学説もない時には、自分の躰でもぶつかると手がない。

・国の方針の確立(略)

・クラブ活動(略)

・人造りとしての山登り

さきの大戦中、南方戦線四年間、主として第二方面軍阿南部隊であった。末期になって深刻になると、各人の性格が顕現されるか、九州人は何から国家観念が強かった。これをしよつ中胸においたまま、昨春偶然、母校に出光佐三氏を迎えた時、宗像神社崇拝で聞える氏に、この胸中を吐いた。

ところが同氏はさも親しうに「それはお前、鍛え方がまるで違ふのだよ」と肩を叩いて言われた。全く私として禪問答の様に感激であり、豁然と目を開かれた思いであった。

これをわが郷土というならば、「山」という素晴らしい、厳しい鍛錬の場がある。そこでこちらが無償の行為でやれば、殆んど可能であろう。もし遭難したら、引受けてやるという責任をもって。

(最後の二行は原文そのまま)

遭難防止と自然保護において一言

私は親しい山友達に屢々尋ねるのであるが、防止届出条例を県外の岳人はどう取っているだろうか。それはし、かめていゝね、と皆言うのである。

地元の者としていやな言葉であるが、県は観光客なら歓迎、遭難するような登山者ならば御免、という風にとられたらどうするのであらう。

別に観光客を否定する積りはないが、次の場合には皆さんどう考えますか。

(次頁へ続く)

(前頁より)

関電野瀬常務(さきの黒四建設所長)が「関電は黒部解放を迫られるが、樺平から上流、黒四ダムまでの軌道解放は、将来とも考えない、解放するとすれば、旧日電歩道を改修して、ザックの登山者御通行には努力する」という風な言明をした。(七月月上旬)

これは敵?ながら天晴れの正論であると思う。

富山で何故こんな判り切った話が通らんのだろう。私はここで又、会報五月号にあったが、加藤泰安氏近著の言を引用したい。

「登山は文化的行為ではない、個人的でなく寧ろ厭人的である」全く同感である。

私達は観光の邪魔をした覚えはない。大いに観光の資源の保護を訴えているが。観光施設は登山の真髓とする領域をぐいぐい破壊する。被害者はわれわれであろう。

この恰好を譬えて言えば、防止条例を出すのは、「教育ママ」であって、若し本当に遭難を心配するのならば、「マザー」する本能をもって温かく篤く親切に指導するに越したことはない。届出書を人手不足で処理出来ないで積んであると言われたら、何をか言わんやである。

・登山の盛況

先輩の言にもある如く、今日登山界も盛況で、登山をすすめる必要もない様であるが、一方野放し

で各団体、各会にまかしておくという訳にも行かない。

さりとて官僚に統制されるのは尚更いやなことである。日本山岳会で先を見通した考えを立てて、学問としても「山岳学」という様な分野を拓き、大いに科学的な、しかも人間的な人造りとしての創造力を発揮したいものである。

(四二・七・一六記)

× × ×
(編者注、石黒さんの急進については前号にも触れておいたが、氏は山に入る前に私のところにこの原稿を送ってこられた。そしてこれが遺稿となったしまった。

元の原稿は12字詰10行、19枚であったが、氏の遠慮勝ちな希望もあり、編者としても「山」としては少々差さわりがあると思ったので「国の方針確立」と「クラブ活動」の二項は削除した。ご諒承願う。

尚、七月二十五日付の葉書で左記のような原稿も送られて来た。

◆ 会報原稿

七月号所載第三六現地小集会(急告)につき御来富の方 六日(七日は現地泊り) 八日

民宿(三名、主として寝具の為)

御来訪(六、八御随時)

富山市五番町二一八

石黒清蔵

U764 (21) 447

表記甚だ唐突な表現ですが、特に問題のない「富山の山登り」について遠慮のない話し合いの場として計画しました。実践派並びに理論派の御来訪を歓迎します。

(以上)

アラスカ 未登峰の登頂 津田周二

兵庫県の若い山仲間が遠征登山を考えていたのを、多少おぼろげにたのがだんだんと実をむすんで来たのが今度のアラスカ遠征登山である。数年前シアトルの山の仲間が神戸へ訪れたのがきっかけになりこんどの登山隊の副隊長になった藤田君が中心となり、初めはカナダのアラスカとの国境近くにある「ルケニア、スタイル」等の山を計画していたのであったが、カナダも今年は建国百年とかで、カナディアン・アルパインクラブでも、この百年祭の記念登山をカナダのこの附近の山で相当大がかりな登山計画をしているとのことと、遠慮の気持もあり、シアトルのマウンテン・アーツの意向で、アラスカの未登峰の内、一番高い、ユニバーサル・レンジのボナの西にある四、四〇八の未登峰を目指すことに定めたのであった。

幸い兵庫県とワシントン州は姉妹州果であり、神戸市とシアトルが姉妹都市であるので、丁度兵庫県の県政百年及び神戸開港百年を記念し、県、市、神戸新聞の積極的な応援を得るに及んで、とんとん拍子に計画を進めることが出来た。その上団長として神戸市の宮崎助役を最後に引張り出すことに成功し、百年祭事業として軌道に乗りすっかりオフ・イシャルな形を整えることになった。多少ごたごたしていた隊員の決定もその後予定通りに定めることができた。

シアトルでは奈良シアトル総領事、ランダー隊長等の案内で、ワシントン州エバニス知事、シアトルブレマン市長等を公式訪問したり、神戸シアトル提携委員会のクリストン氏を訪れた

りそれ等の合同レセプションがあったり、山登り以外のことが少々多過ぎたけれど、民主的であるアメリカが意外に封建的であり、いろんな社会勉強が出来たのは幸いであつた。

山のことにについては藤田副隊長が話しているから省略させて頂き、ベリスキャンプで藤田副隊長に総てを依頼し、宮崎団長と共にラッセル氷河を後にし、一応フェアバンクスに戻り、翌日アラスカレンジの真中にある山地エスキモーの住むアナクチュエバック・バスへ行く。更にフォトユウコンのインディアン部落を見学し、翌日にアラス

文部省登山研修所の開所

文部省体育局スポーツ課が登山センターとして準備をすすめていた標記研修所が完成、七月一日午前十時三十分より開所式が行なわれた。

開所式には、本会名誉会員横有恒氏、辰沼常務理事が東京より出席、本会も祝電を打った。

同研修所は、本会石原評議員が設計に当り、三階建、延四一六坪、収容人員は八四名である。

六月一日付、井上所長、岡事務官等職員七名が発令されたが、この中には本会々員佐伯富男氏が、専門職として入った。

とり敢えず今夏には七月二八日(八月一日)にかけて高等学校の登山指導養成研修会、八月二〇日(九月六日)に大学山岳部リーダー養成研修会が行なわれるが、本会の学生部、指導委員会も協力することになっている。

尚本研修所の効果的な運営を図るために一〇名の運営委員が委嘱されているが、この中には、横有恒、加藤泰安、今西錦司、深田久弥、水野祥太郎、牧野平五郎、村井米子氏の七名の本会々

カの最北端であるポイントパロウに、ウイン航空で行く。正にエスキモーの住む地の果に、近代設備の学校、兵営、極地研究を見せられる。

これ等については何れ又書くこともあるかと思うが、計画のほんの概要のみを走り書きました。

尚この度登頂した山をマウント・コウベと名をつけたのはアメリカの意向であつて、日本側から云い出したのは決してなく、アメリカの好意に甘えることになったのです。少しくおもしろい思いがしています。

絵画の寄贈

山里寿男氏より

会報二六五号でお知らせしたように会員山里寿男氏は、去る八月四日(九日、銀座松屋の七階画廊において「ヨロツバの山、日本の山」山里寿男展)を開催し、好評裡に展覧会を終了したが、この度同展覧会に出品した絵の中より次の二点を本会新ルームに寄贈されましたのでお知らせ致します。

●油、十号(Junkman)、一九六六年十一月十九日作品

●水彩六号「潤沢より北穂高」一九六六年五月二十四日作品。

松方三郎氏より

有名なシュラギントワイトの作品の「The Summit of Kanchenjunga in the Himalaya of Shikim」松方会長愛蔵品を新ルームのために提供された。本会では会議室の中央に掲げて会員の観覧に供することにした。

大高山から小倉へ

中村 謙



六月の中旬、友人に誘われて野尻湖から三壁を通って大高山（二〇七九・四米）に登り、五三郎小屋から天狗原を登って小倉へ降り、大池から平兵衛池・大平湿原・草津へ行って参りました。

大高山から小倉への道は近年つくったみちで、かくべつどうというところもございませんが、私どものように足の悪いヨタヨタが雨に降られながらも通れる道ですから、覚えておいてもよいでしょう。でも奥山の経験のないズブの素人ではだめです。

われわれがいったのは先月十七日です。野反湖のバスは十五日から通るといっていましたが、いつものことで、崖崩れがあるとか何とかいって通りませんでした。やむをえずハイヤーで野反湖まで参りました。湖畔を彩るツツジは、まだ咲きがけながらも見ごとし

た。金山沢の手まで車を降る。野反湖には知らないうちに第三キ

ャンプ場までできて、びっくりしました。お茶をもらって三壁に登り、かもしか原に降りましたが、相かわらずのんびりした原で、まだ花はありませんでした。ここから大高山へ登る途中、梅雨がしとしとと降ってきました。大高山から五三郎小屋までは、まったく雨の中で、小屋へよろうと思

ったが、時間もないうちに直ぐ新道に入りました。

しばらくでミドノ池が見えて参りました。かつて落人の隠れた池とか。この辺から気持ちのよい天狗原がつづきます。お天気だったから、さぞよいところでしょう。その中に歩きずらい尾根の横みちに入りました。カップがよきにょき出ていて、とても歩きずらいです。そこを二、三〇分もすぎますと、道は自からどんどん下るようになって一時間後にはミドノ沢に降り、やがてこれかかった小屋のところに出ます。まずひと息とい

うところでしょう。沢を渡って小川を跨ぐとガランの谷へいく道に出ます。そうすればもう道はよく、一時間ちょっとで小倉へつきます。われわれが野反湖を出たのが九時三十五分、大高山が三時三〇分、小原分岐が四時一〇分、小倉へついたのが夜の九時、ガランの谷への分岐を少しいったところから懐中電灯をつけましたから、ふつうだったら十時間あれば十分でしょう。

小倉では山口仙十郎方に御厄介になりました。仙十郎さんは地元

の有力者だそうです。翌日は群馬鉄山跡まで車を出してもらい、そこから営林署の林道に入る。これは近年営林署でつくった道だそうで、たいへん登りやすくできています。秋などは黄葉紅葉で、それは美しいかぎりだということです。きのうは長野原高校の先生に案内してもらったが、今日は六合村山岳会のかたに案内してもらいました。

大池は幽邃な池です。こんな大きな池が五万分の一地図にもあらわれずによこたわっているという

ことは、まこと不思議という他はございません。あたりにはツツジが多く、ワラビがたくさんでておりました。

ここから平兵衛池までの道は刈払いがわるく笹におおわれていました。あいにく平兵衛池でも天気がわるいため浅間山を見渡すことはできませんでした。

大平湿池に下って食事をする。じつにのんびりしたところで、ミズバショウは少し遅かったようです。カラマツ林をとおして白根山がよく見えました。

横笹からは草津への道を降りましたが、このころは人通りもあまり多くないと見えて態々が跳梁し、むかしよりも時間が余計にかかるように思われました。それにしても香草温泉が、まだあのまま

なっているのが残念でした。大池からのコースは日帰りでも結構です。高崎駅前の一番ののれ

ば、太子駅が七時七分でバスは七時五〇分ごろ花敷につきます。それから小倉を経て小倉橋から右に入って群馬鉄山跡が一〇時半。草

第八回

登山技術講習会

のお知らせ

指導委員会

毎年、実施しております登山技術講習会も回を重ねること八回、今年度も五月下旬に実施の

「講習内容」 冬山での生活から登山技術の基礎まで。

「対象」 会員又は会員の紹介者で冬山登山についての基本を研修しようとする初級・中級の方。

予定でございましたところ、東京支部の解散などがあり、延期の止むなきに至っております。

「予定スケジュール」 11月23日東京出発（貸切バス）富士五合目キャンプ泊。

しかし此れまでの実績からその意義が認められ、本年から指導委員会によって実施されることになりました。

24日 富士吉田口側五合目七合付近でトレーニング。

委員会といたしました。今回は特にこれから冬山を本格的にやってみようとする初級の方々を対象として、日本山岳会らしい交流、親睦を尊重した、楽しい講習会にしたいと考えております。

25日 午後 富士五合目発 ー東京着。

委員会といたしました。今回は特にこれから冬山を本格的にやってみようとする初級の方々を対象として、日本山岳会らしい交流、親睦を尊重した、楽しい講習会にしたいと考えております。

26日 午後 富士五合目発 ー東京着。

「講師」 山崎安治、金坂一郎、村木潤次郎他

「費用」 会員五、五〇〇円、非会員六、〇〇〇円（いずれも概算）

「申込方法」 本会ルーム指導委員会宛連絡くだされば申込用紙を送ります。

尚、貸切バスの都合で構成が講習生三〇名、講師一〇名、本部三名となりますので、先着順三〇名で締切ります。（広谷）

「場所」 富士山。

「期日」 昭和42年11月23日、26日

—ソ連領パミール、天山初登頂史—

編者 S. M. Savvon

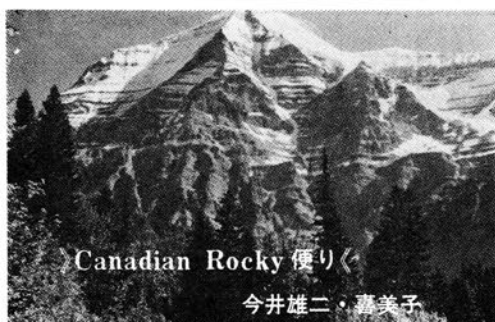
訳者 田村俊介

1966年にモスクワで出版された「征服された峰々」副題「ソ連アルピニズム年鑑1964年—1966年」に、ソ連領パミール、天山に於て、1928年より1964年までの間に行なわれた6,500 m以上の山の初登頂及び初登攀（バリエーション・ルートからの）の年代記が発表された。この中から初登頂のものだけをとり出し、原文では山名別に各項目が羅列してあるのを次のように一表にまとめてみた。（訳者）

山 名	高度(m)	年月日	山 域	ルート	困難度	隊 名	隊 長	初 登 頂 者	備 考
1. Pik Lenina (レーニン峰)	7,134	1928. 9. 25	Pamir Zaalaisky 山脈	南面から Krilen- ko峠。東 稜を経て	V-A	ソ連科学 アカデミ ー(ソ連 ドイツ遠 征隊)	N. P. Gorbunov N. V. Krylenko V. R. Rickmers	E. Allwein K. Wien E. Schneider	現在までの記録；登頂数—368名(中国人17名、ドイツ人3名、ルーマニア人2名、チェコ人1名を含む)。初登攀ルートより10隊が再登頂、多数同時登頂(28名)を2度記録—(1958年にK. Kuzmin隊21名のソ連人と17名の中国人、1962年にV. Monogorov 隊の28名が登頂。)
2. Khan-Tengri (ハン・テンリ)	6,995	1931. 9. 11	天山。 Tengri-Tag 山脈	南西斜面 より	V-B	ソ連科学 アカデミ ー	M. T. Pogrebet- sky	M. T. Pogrebet- sky. F. Zaub- erer. B. Tyur- tin	現在迄の記録；6隊—初登頂ルートより登頂。2隊—他のルートより登頂。
3. Pik-Kommun- izma (コムニズム峰)	7,495	1933. 9. 3	Pamir Akademiy- a Nauk 山脈	東稜より	V-B	ソ連科学 アカデミ ー。タジ ク—パ ミール遠 征隊)	N. P. Gorbunov	E. A. Abalak- ov	現在迄の記録；登頂数—12回、登頂者数—86名(イギリス人4名を含む)。(1963年、64年は登られていない様である)。
4. Pik Dzerzin- skobo (ジエルジンス キー峰)	6,719	1936. 8. 11	Pamir Zaalaisky 山脈	Razde- linaya 峰を経て 北面より	IV-B	ソ連陸軍	L. L. Barkhash	E. Beletsky L. Fedorav	
5. Pik 20-Leti- a-Komsomola (コムソモール20 周年記念峰)	6,930	1938. 9. 19	天山 Kokshaalta- u 山脈	北面より	V-B	全ソ体育 スポーツ 委員会	A. A. Letaet	L. Gutman E. Ivanov A. Sidorenko	登頂は視界のきかぬ中で行なわれ、その時の高度計は6,930mと記録されていた。そこで初登頂者はこれに標記の名をつけたが、後になって実はこれがPik Pobedaの一突起である事がわかった。1943年になってこの山塊が7,439 mの高度を持つ天山の最高峰である事がわかった。
6. Pik Marksa (マルクス峰)	6,726	1946. 9. 6	Pamir Shakhdarin- sky 山脈	Shaba- ya 峡谷の 北面から、 西稜を経て	IV-B	全ソ体育 スポーツ 委員会	E. Abalakov E. Beletsky	E. Abalakov E. Beletsky A. Bagrov E. Ivanov A. Sidorenko P. Semenov A. Ugarov	南西パミールの最高峰であるこの山は、登頂される迄7,000 m ぐらいと推測されていた。現在迄の登頂数—8回。
7. Pik Garmo (ガルモ峰)	6,595	1948. 8. 30	Pamir Darazsky 山脈	Vavilov 氷河より	V-B	全ソ体育 スポーツ 委員会と 「ナウカ」	A. Mukhin	A. Bagrov A. Gojev V. Gusev I. Paibok A. Ivanov V. Ivanov V. Mukhin	この登攀で隊員 I. Miroshkin が肺炎で死ぬ。
8. Pik Korjene- bskoi (コルジェネフス カヤ峰)	7,105	1953. 8. 22	Pamir Ak-Korjen- ademiya Na- ebskoi 山脈の北 西支脈	氷河より	V-A	全ソ労働 組合中央 会議	E. Beletsky D. Zatulobsky	A. Ugarov A. Gojev B. Dmitriev その他5名	現在迄の登頂数；2回
9. Pik Drujby (ドウルージュバ 峰)	6,800	1953. 9. 7	天山 Meridional- iny 山脈	北面から 縦走 Iny- lichek 氷河より	V-B	ソ連陸軍	V. Patsek	V. Nozdryukh- in. P. Karpov V. Kovacev E. Hagel	ソ連で最初の6,000m峰の縦走。
10. Pik <6500>	6,500	1953. 9. 7	Pamir Yazgulems- ky 山脈	Grum- Grjima- ilo 氷 河より	IV-B	全ソ労働 組合中央 会議	E. Kazakova	P. Skoroboga- jov. V. Maslov A. Vgarov	Pik Revolyutsy のルート偵察の時に登頂される。隊長は女性。
11. Pik Revoly- utsy (レヴォリユーチ イア峰)	6,987	1954. 8. 17	Pamir Yazgulems- ky 山脈	Grumm- Grjim- Ailo 氷 河より北 東稜を経て		全ソ労働 組合中央 会議	E. Kazakova	A. Vgarov P. Andreev A. Gojev A. Kovyrvkov E. Ryspaev その他5名	
12. Pik Engelisa (エンゲルス峰)	6,510	1954. 9. 5	Pamir Shakhdarin- sky 山脈	Kisty-D zarob 氷 河より南 壁のクロ アールよ り	V-A	グルジア 山岳会	O. Giginishvili	M. Gvarliahi G. Gulibahi K. Kuzimin A. Nemsit Sv- eridze	現在迄の登頂数5回、初登頂ルートは初登の時のみ。隊長は1966年7月に来日。

山 名	高度(m)	年月日	山 域	ル-ット	困難度	隊 名	隊 長	初 登 頂 者	備 考
13. Pik Oktyabrsky (オクチャープリ スキ峰)	6,780	1955. 8.15	Pamir Zulmart 山 脈	Oktyabrsky 氷 河から Pik Ed- instvaを 経て	IV-B	全ソ労働 組合中央 会議	E.Beletsky K. Kuzimin	E. Beletsky R. Andreev A. Ivanov D. Klyshko M. Shilkin A. Shkrabkin B. Shlyaptsev 他に中国人4名	この登攀で Pik Oktyabrsky から Pik Lenina の 縦走を実行し、Pik Edinstva の初登をも行う。
14. Pik <6848>	6,848	1955. 8.17	Pamir Akademiya- Nauk 山脈	Garmo 氷河より	V-A	グルジア 山岳会	O. Giginishvili	M. Gvarliani Z. Akhvediani L. Akhvediani D. Oboladze D. Gugava S. Gugava I. Kakhiani D. Medzmariashvili M. Khrgiani	隊長及び Akhvediani は '66,7 来日。1958 年にレ ニングラードのクラブ <トルド>が P.6848-P. Kommunizma 縦走を行 う。
15. Pik Pobedy (ペーダ峰)	7,439	1956. 8.30	天山 Kokshaalt- au 山脈	北稜より	V-B	スバルタ ク-カザ ク山岳会	V. Abalakov	V. Oboladze V. Abalakov Ya. Arkin P. Bydanov N. Gusak K. Kletsko V. Kizeli I. Leohov S. Musaev Yu. Tur U. Usenov L. Filimonov	現在迄の登頂数—4 回、登 頂者数—25 名。(3 つのル ートが開かれている)
16. Kyzyl-Agyn (クズルーアギン)	6,678	1956. 8.30	Pamir Zaalaisky 山脈	北東稜よ り	V-A	ウズベク 体育スポ ーツ会議	V. Ratsek	V. Elichbekov E. Hagel	現在までの登頂数 3 回。
17. Pik 26 Kom- issarov	6,834	1957. 8. 6	Pamir Yazgulems- ky 山脈	Fedchenko 氷河 より	V-B	ブレベッ ツニク	E. Tamm	E. Tamm 他 7 名	1960 年ブレベツニク隊 (隊長 A. Miklevich) に より第 2 回目の登頂
18. Pik Leningrad (レニングラード 峰)	6,507	1957. 8.17	Pamir ビョートル 1 世山脈	Pik Kommuni- zma の プラトー より	V-B	ブレベッ ツニク	K. Kuzimin	K. Kuzimin E. Ibanov 他 13 名	(ルート) Pik Kuibyshe- va-Pamirskoe Firnovoe Plato—頂上。この時全隊 員に<レニングラード 250 周 年>のメダルが与えられる。
19. Pik <6852>	6,852	1958. 9. 8	Pamir Zaalaisky 山脈	Saukda- ra 氷河 から Pik Lenina を経て	V-B	ソ中合同 隊	K. Kuzimin	K. Kuzimin 他ソ連人 3 名 中国人 4 名	
20. Pik Akhmat- ta Donisha	6,666	1959. 8.19	Pamir Akademiya Nauk 山脈	Odinna- dtsati 氷 河より東 面から	V-B	スバルタ ク	V. Abalakov	V. Abalakov Ya. Apkin 他 8 名	1964 年に V. Voronin を 隊長とする<Mekhnata> により再トレス。
21. Pik Moskwa (モスクワ峰)	6,785	1959. 8.20	Pair Akademiya- Nauk 山脈	南東稜よ り		ブレベッ ツニク	L. Antonovich K. Kuzimin	I. Vogachev 他 7 名	
22. Pik Fikera	6,718	1959. 9. 1	Pamir Yazgulemsky 山脈	Vitkobs- ky 氷河 より西稜 を経て		氷河調査 隊。(ウズ ベク共和 国科学ア カデミ ー。)	V. Nozdryukhin	V. Nozdryukhin P. Lifanov N. Nazarov V. Rachkulik	
23. Pik Aleksandra Grina	6,525	1960. 8.16	Pamir Yazgulemsky 山脈	Fedchenko 氷河 から、東 稜を経て	IV-A	ブレベッ ツニク	V. Smit	V. Serebryakov O. Efimov R. Zatrugina M. Smirnov V. Spassky	1964 年に A. Kuzhetsov を 隊長とするチェリヤピンス 州ソヴェトの<トルウ ド>が再トレス。
24. Pik Pionerskoi Pravdy (ピオネールスカ ヤ・ブラウダ峰)	6,550	1961. 7.30	Pamir Akademiya Nauk 山脈	Bivach- ny 氷河 を経て南 東稜より	V-A	ブレベッ ツニク	E. Tamm	O. Bragin A. Belopukhov V. Bojdukov 他 3 名	
25. Pik Tadjikistan	6,565	1962. 8.28	Pamir Shakhdarin- sky 山脈	Dpidj. 氷河を経て 東稜より	V-B	ブレベッ ツニク・ レニング ラード・ L.G.U.	A. Gpovov	S. Savvon K. Bykov Yu. Zapichhyak 他 3 名	
26. Pik Izvesty (イズベスチャー 峰)	6,840	1964. 8.12	Pamir Akademiya Nauk 山脈	Pik Ord- jonikidze- (Pik Pionerskoi Pravdy)- (Pik Uzbek 40 周年) を経て	V-B	メフナッ ト	V. Elichibekov	V. Elichibekov V. Voronin 他 6 名	ウズベク 40 周年峰(6,700 m) はこの時が初登
27. Pik Shater (シャテール峰)	6,636	1964. 7.27	天山 Tengri-Tag 山脈	Inylchek 峠 から	V-B	トルウド	B. Romanov	B. Efimov L. Bakursky 他 12 名	
28. Pik Toreza	6,726	1964. 7.25	天山 Meridional- ny 山脈	南西稜よ り Inylchek 氷 河より	V-B	トルウド	B. Romanov	B. Romanov 他 7 名	

海外通信



Canadian Rocky 便り

今井雄二・喜美子

◇

いまバンフのカナダ山岳会クラブハウスに泊っています。

七月四日バンクーバーへ着きました。が、ちょうどその日がバンクーバー支部の月例会があるというので Secretary の Miss Logie の案内で参加してみました。集会は市から三・四十分ドライブの Lighthouse Park という森林のはずれ、海に臨んだところで、ピクニックの形で行われていました。老人、老婦人から青年や若い娘さんたち五十人ほどで、家族同伴も来ていました。泳ぐものもあり、岩壁で岩登りを楽しむものもあり、みんな楽しそうにやっています。

私たちもそれにまじって夕七時ごろから十時ごろまで美しい夕陽を浴びながら楽しく交歓しました。十時になってようよう日が暮れるのには驚きました。

翌日は校内三井物産支店長の案内で The Province 社を訪れ、編集長の Raddy Sherman 氏に会いました。氏のことば「Cloud Walker」という著書で知っていましたが、彼の室にはマッギンレーなどアラスカの山の写真が飾ってあり、二日後には山岳会の建国百年記念登山にアラスカ国境のユコン地方へ出かけるといっていました。今度の登山では無名の未踏峰登攀をやって、そのピーク一つ一つにカナダ各州の名をつけるのだそうです。

ここバンフのクラブハウスへは七日の夕方着きましたが、その立派なのに驚きました。

ロビー・食堂・図書室など大したもので、山の中腹にありますが、森林の中にはキャビンがたくさん建っていて、そこに寝泊りしています。キャビンは山名がついていて、私たちの「Mt. Edith」という二人用ですが、広さが十八畳敷ほどあり、ベッド、ガスストーブなど完備されていて快的でした。

食堂やロビーでは山岳会員の人達と歓談しますが、皆とても人なつかしげに話しかけてくれます。昨日夕食のとき、隣の席に坐ったのが前山岳会長の Hind 氏夫妻で昨年日本に来たときのことなど話していました。

アメリカ、イギリスなどから来ている人もあって家族同伴も相当多く楽しそうにやっています。

七月十一日からいよいよ Mt. Assiniboine の Sunburst Lake Camp へ入ります。約一週間滞在の予定ですが、またお便りいたします。

◇

今ごろ東京はお暑いことと想像して

います。こちらでは日中二十五度位に昇りますが、朝は十度以下で、しかも空気が乾燥しているので大変楽です。さて、七月十一日から Mt. Assiniboine へ行き五日間滞在、十五日またこのカナダ山岳会のクラブハウスへ引きかえしてきましました。Banff の東南二十哩ばかりのところに Cannock という田舎町から荷付人夫のトラックで一時間半、車道の終りで馬に乗りかえ十四哩、アッシンボイン峠を越えて Sunburst Lake Camp へ着きました。

アッシンボインを中心とする岩峰にかこまれた高原地帯で、草原あり、森林あり、湖沼ありで景観の美は申し分ありません。峠を下ってカナダのマッターホルンといわれるアッシンボインの端麗な姿を真近かに見たときは胸を打たれました。

毎日この高原地帯をあちこち歩きまわって見ましたが、残雪の消えたところにはアモネネなどいろいろな花がいっぱい咲いて、文字通り足の踏み場もありません。

今年は例年よりも残雪が多いとかでまだ登頂に成功したパーティはないそうです。

岐阜県岳連のパーティに途中で会いましたが、登頂をあきらめて一旦下山、八月にまた来るといって下って行きました。

私たちはアッシンボインの隣の Mt. Magog と Mt. Terrance の間にかかっている氷河を登ってホルまで行ってみました。かなり急な登りでしたが雪が柔かくて苦勞しなくてすみました。

この辺り私たちの泊った Sunburst Lake Camp から三哩ほど離れて山岳会の無人キャビンもあります。樹林の中にひっそりと建っていて好ましい感じ。ところがこの近く Magog

Lake 湖畔の草原台地にはカナダ太平洋鉄道が建てたキャビンが幾つも建っていて、折角の風景をぶっ壊しています。観光に名を借りて風景破壊をやっている業者の無定見はいすも同じだと感じました。ここに来ているのはせいぜい十数名ぐらいですが、みな釣りが目的のようで五〇センチぐらいのマス釣りをあげています。登攀目的らしいのはガイドをつれた四人組に会っただけです。

いま山岳会のクラブハウスに帰ってきている写真が飾ってあり、ウインバーの会長の写真が飾ってあり、ウインバーがロッキーマウンテンに使ったビッケルや、一九〇九年 Mr. Robson に初登攀した Phillips が使った杖などいろいろ記念すべきものも飾ってあります。

明日から Lake Louise, Moraine Lake, Jasper, Mt. Robson へ向かって出かけるつもりです。

七月十八日
バンフの山岳会クラブハウスにて
(吉沢一郎宛)

◇

その後、Lake Louise, Moraine Lake を通り、只今 Mt. Robson の Berg Lake Chalet に来ています。ルイズ湖とモレーン湖では雨のため山登りはできませんでしたが、一日晴れ間を見て Ranch Valley から Mt. Temple の Sentinel Pass まで登ってみました。真近かに Ten Peaks が連なっていて、お花畑からのすばらしい眺めに心を打たれました。

ここバグ湖小屋へ来てから一週間になります。この小屋は一九二四年に建てたもので、その初年の七月二六日には、ロングスタッフも泊っています。一五人ぐらい泊れる小屋ですが、この一週間毎日八人ぐらい入れかわり

泊っています。殆んどがアメリカ人、今日は娘をつれてロンドンから来たという夫妻と、オーストラリアから来た婦人も一人います。どれも休暇を利用してのハイキングといったところで、馬に乗ってあちこち歩きまわっています。クライマーは二、三、近くでキャンプしているのを見かけましたが、ごく僅かのようなです。

私達は小屋の背後の無名峰に登ったり、大きなロブソン氷河を登ったりしてみました。さすがにロブソンはカネディアン・ロッキーマウンテンの最高峰だけあって、どこから眺めても貫録十分といった感じで、アッシンボインが女王なら、これはキングといったらいよいよでしょう。

その主峰の間近かに Rearguard という岩峰があって、バグ湖を隔ててすばらしい二〇〇m の岩壁を見せています。私達は昨日これに登ってみました。私達は昨日これに登りましたが、久振りに岩の感触に酔う思いがしました。このピークへのルートとして Thorington の Climbers' Guide to the Rocky Mountain of Canada, 1966 年版には、三〇〇の記録を紹介していますが、私達はそれと異なると、バグ湖に面した西面を登ってみました。ロブソン山塊の中で特に目立つ特異な姿をみせているこの岩峰に登頂した喜びを最後に、いよいよ明日は山を下り、一ヶ月にわたったロッキーマウンテンの旅に別れを告げることになります。

なお、岐阜県岳連の男三人、女性三人のパーティが一八日から Kinney Lake にベース・キャンプを設けて、ロブソン山面に挑んでいるのに会いましたが、ついに七月二九日、Halt-Further Variation route の登攀に成功したそうです。

八月二日 マウント・ロブソンのバグ湖小屋にて、
(吉沢一郎宛)

◇国際アルピニスト集会

を前にして◇

前略、七月九日、今日、伊藤と二人でシャモニーに入りました。

モンブラン一帯は真白に、その中に槍・針のように突きでているエグニール・ミディ・ドルニ・グレボン、シャモニーの谷に黒く舌を延ばしているボツングレイシャー、何時見ても圧倒されます。(注・山名原文通り)

学校の入校が七月十日(明日)に指定されていますので、今日は賑うバカンス客の中で、ホテル泊りしております。

伊藤も快調、長い旅の疲れも見せず、フランス料理をきょうことなく何でも喰べてます。小生の方も、いまでもなく調子上々です。私達の装備の方は全部最後の点検も終え、必要なものはみな用意出来ました。

明日、月曜日にはガストン・レビエフアの宅へ挨拶にゆきたいと思っております。

今年の雪の状態ですが、ちょっと登って見ないと分かりませんが、ガイド達



の話では、例年なみ、ということでした。昨日、一昨日とモリジンスで雨に会いましたが、このモンブラン周辺では、三四〇〇〜五〇〇米から上では岩の針峰の上にも真白く新雪をかぶっております。

私達はこの集会の期間中に、いろいろ検討して四つのコースを決めました。第一回目、「モンブランの縦走」(一般ルート)ボツングレイシャーからモンブランを経てエグニール・ミディに下る。二・三日。

第二回目「エグニール・ベルトの登攀」(一般ルート)四・五級。

第三回目「グレボンの登攀」(一般ルート)一・二日。

第四回目、「ダン・ド・ジャイアン」の登攀」(一般ルート)一・二日。

天候の関係で、これだけ一機上アップランとしてやることに決めておりますが、小生らは出来れば、グランド・ジョラスの下の方に偵察に出てみたいと思ったりもしています。そしてより広く歩き廻って、山を見たいのです。明日から学校が私達の宿になります。登山には、本当に慎重にやっております。JACの皆様、山岳部、OBの皆様、宜しく。 植村直己 (大塚博美宛)

◇ボリビア婦人親善隊◇

今年の日本の梅雨は雨のない毎日だったとか、それにひきかえボリビアでは、曇天の日々が多く、雨や雪にあうこと度々で、話にきいていた様子とは随分ちがっているの、少しとまどっています。

高度順化のため登山した山々は、軍事用の新しい地図によりまると、ラウラニという名称ではなく、アイマラ語

の名が別に冠せられています。コルデアラ・レアルは大きな山脈で、まだその名さえも瞭々きりしない山々が沢山あるのではないのでしょうか。

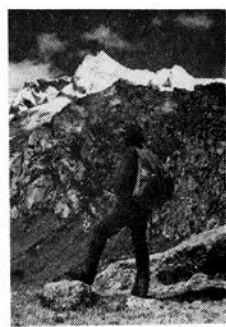
さて目的の山、ワイナボトシ(カカアカ)には七月一日から入山し、四九二〇mほどのところにベースを張りました。ボツカ力のない私達の事です。で、ビバークを覚悟で三日頂上をめざし出発しました。

五七〇〇mほどのところでビバーク、四日二時五分登頂、五五〇〇mほどでビバーク、五日下山しました。今、イタリア隊が、ワイナボトシに登ろうとしています。 関田美智子 (吉沢宛)

◇スピッツベルゲンより◇

前略、再び北の涯にやって来ました。スピッツベルゲンはこの絵はがきのように中々美しい所です。今年の夏は20隊も隊が、この島の各地で山登りと動物の観察を行っています。グリーンランドよりは、一まわりスケールが小さいですが、北緯70度の風は可成りきびしいものがあります。未踏峰は数える程しかありませんが、若い人達のトレーニングには最適のような気がします。氷河のクレバスもずっと小さいようです。ケンブリッジ大学が四年も連続してこの島に入っています。(七月二十一日付、スピッツベルゲンのマガダレナ湾(Magdalenbay)にて) (松田雄一宛) 五月女次男

◇アダマス・カーターより◇



日付はないが、リマのカラバヤ局での消印は七月八日となっている便りが来た。表は上掲の写真である。

吉沢さん、われわれは七月四日にこのカシヤン西峰(Cashan Oeste, 5201m)に初登頂しました。本当に難しい山でした。こんな山でも固定綱を五〇〇mも使いました。登ったのは私の息子のラリー(Larry)、それにアンダーソン(Don Anderson)とミラー(Jack Miller)の三人でした。

その後われわれ全員でワマシユラフ(Huamashraif)に登り、ヤナマレイ(Yanamarey, 5263m)の初登攀をしました。これも小さいが相当手こずりました。御気遣よう。(H・A・C) (注・二六四号一六頁下段参照)

『主な海外登山』VI

一九六七年

『Hindu Kush Expeditions』

ヒンズー・クシュへの遠征隊については、『山』に左記の通り発表してあるが、広島大学の船橋明男氏からの現地報告の分を加えると、私に瞭々きりしていないものが、六隊もある。詳細について御存知の方は、JAC宛御知らせ願えると有難い。

尚、東大隊は滞在ビザがもらえないため、カブールで毎日交渉しているとのこと。

既報の隊(数字は「山」の号数)

- 千葉岳連隊 (261)
- 広島大隊 (264)
- 中央大隊 (265)
- 一橋大隊 (266)
- 東京農大 (267)
- 山口大隊 (268)
- RCC II 隊 (269)

詳細不明隊
東海大学、東洋大学、新潟大、大阪府立大、東京大学、都立大、

◇マイク・バンクス記念写真◇

前号に間に合わなかったのここに掲載。撮影者は村田氏(防衛大)。



上は北尾根・M. Banks と大須賀氏。
右は上高地・上記両氏と夫人。

JACの会員二名隊。

計14隊

尚、京都の教育大隊がスワートの一部を採ったことを耳にしたが、詳細未詳、阿部恒夫氏からの通知を待っています。(吉沢)

ネバド・ヒリシヤンカ主峰 (6120m)



ワイワッシュ便り (Huayhuash)

白稜会

Carhuacocha からの
七月三日付の便り届きま
したしょうが。

昨七月二日夜、チキ
アンよりリマへ無事帰着
致しました。

カルワコチャに B・C
II を張ってからは天候の悪い日が多
く、あまり成果はあがりませんでした。

Rio Santa の BC を撤収する日、
Pocpa から来たアリエロから農工大の
バーティは六月二六日に Mitucocha
に入った旨聞き、ヒリシヤンカへの B
C はミツコチャの方が良いことは判っ
ていたのですが、もろにかち合うのは
よくないと考え、カルワコチャに入り
ました。

七月四日にヒリシヤンカの偵察を兼
ねて、ミツコチャへバーティを出した
ところ、農工大バーティは相当に大が
かりらしく、登れるまでねばる覚悟で
殆んどこのメンバーが勤務先をやめて日
本隊同志で張合うのもつまらぬ話です
し、山容その他から、我々の日数・技
術では可能性は薄いと判断し、目標を
変更しました。

主目標を El Toro (6121 m) とし七
月五日に偵察 Yerupaja 氷河から Ye-

rupaja Grande とのゴルに出て登る
のが最適と判断し、七月六日に氷河末
端の四七〇〇m 附近に AC を建設 (B
C は約四一〇〇m)。

氷河は非常に荒れていて氷河の中に
天幕を張るのは危険な状態でしたの
で、AC から一気にラッシュする計画
で七月七日〜一日の五日間をかけて
氷河の中のルート作業を行い、ゴル
直下の氷河最上端約五二〇〇m 附近ま
で作業を終ったところで二日にラッ
シュアツクをかけ、一回ビバークを
重ねて一四日朝に本田・秋野が登頂に
成功しました。昨年登頂したバーティ
がなければ、一九五七年のオーストリ
ア隊に続く第二登と考えられます。

技術的には、さほど困難なものでは
ありませんでしたが、常時ブロックの
崩壊する氷河にルートを確保するのに
神経を使いました。

幸いルートフラインディングが良か
ったのか、この八日間にルートを切断
されたことはありませんでした。

固定網は一部標識的な意味のものも
ありませんでしたが、氷河中に一一〇〇m を
使用し撤収したのは約半分です。

その他、七月五〜六日は本田・宮
田。七日に新井・秋野・宮田のバーテ
ィが、いずれもヒリシヤンカ・チコ
(五四六七m) をアタックし、五二〇
〇〜五三〇〇m の地点まで達しました
が、両バーティとも敗退しました。

ヒリシヤンカ・チコの可能性あるル
ートは Carhuacocha と反対側にあ
り、アプローチが遠いため、いずれも
ビバークして枯ったのですが、最後の
部分は脆い岩の登攀となり、前者の場
合は北稜とでもいへばいいのですが、
天候不良で全く視界がきかぬため引返
し、後者の場合は東稜の初登の際のル
ートですが、記録にある南面へのトラ
バースが出来ず、東面の真上はかなり
危険な状態だったので引返しました。

其他は El Toro への AC 撤収前
に、七月六日 AC から市川・本田及
び Portador のセロヒコ・カコーベの
三人 Yerupaja の前山とも云うべき
Santa Rosa (5085m) に登りました。

モラレスのリストによれば未登とのこ
とだったのですが別段どうということ
のない岩山なので、どんなものでしょ
うか。ただ我々は降雪の直後に雪を利
用して登りましたが、普段はポロボロ
の岩なので見向きもされないというの
が本当のところかも知れません。

この山へ登った収穫は、Santa Gra
nde へのルート偵察が出来たこと、
我々の El Toro への氷河よりもはる
かに楽に、Yerupaja-Santa へのル
へ出ることが出来、しかもこのゴル(五
七〇〇m)あたりに AC を出すことが
可能と見えた。そうすれば、残りの
約六〇〇m はかなりのやせ尾根ですが
なんとかなりそうです。このことにも
う少し早く気がつけば、そしてもう少
し日数があれば Santa も登れたかも知
れませんが。我々は現にドイツ隊のビバ
ーク跡も見つけました。

今日は日曜ですので、午後より荷の
整理を行う予定ですが、以後のスケジ
ュールは、一切荷の返送のための手続
き及び飛行機の手配の都合次第となり
ますので、現時点では何とも云えませ
ん。山への出発が遅れましたので帰国
も若干遅れることになるかも知れませ
ん。特に今週末の金曜(七月二八日)
はペルーの独立記念日で、金、土、日
と三日連休になるので、いろいろの手
続がスムーズに行かぬと思います。

又、こゝまで来てクスコあたりを見
ずに帰るというのはばからしい話です
し、帰国日に關してはスケジュール決
定次第お知らせします。

いずれにせよ、ふところのものとの
相談の上ですが、現在の処、ほぼ予定
通りの線ですので大きな不足を生ずる

ことはない筈です。
いずれ又お便りします。皆さんに宜
敷く。

23 de Julio '67 市川 正
追伸

書きもらしましたが全員非常に元気
です。高山病は前半で皆卒業しました
ので、殆んど薬の厄介にはなっており
ません。

でも歩かれました。
波打際に残した私の足跡を一つ一つ
辿りながら、アリランを合唱する女学
生たちの声を背中に受けて、そのムード
に酔いました。

◇徳積島便り◇

Seoul から汽車で一時間。仁川から
船で四時間のところに、徳積島があり
ます。美しい島です。人口は八千人と
も一万人ともいいます。最高峰は僅か
三百米ほどのものですが、面白い岩壁
には、トラジの花が咲いていました。

今度の旅は、高嶺山岳会のキャン
プに同行させてもらったもので、私を含
めて総勢二四名の大部隊でした。その
うち、女子高校生が九名おりました。
この旅行中、もっとも嬉しかったこ
とは、この女学生たちが、すっかり私
になつてくれたことです。

概して、韓国の人たちは、非常にホ
スピタブルであります。Seoul のよ
うな都会では、その厚意がわずらわし
いこともあります。もちろん、私の我
俣のせいでもありません。徳積島
のように、電機はもちろぬ、食糧さえ
売っていないようなところの生活で
は、そのホスピタリティが、そのまま
受け入れられ、韓国の人たちの良さを
再認識いたしました。

山に登ったり、海で魚を採った
り、キャンプ・ファイアーを囲んでの
一刻は、韓国へ来て良かった、しみ
じみ感じさせてくれました。

徳積島での最後の夜は、女学生たち
にせがまれて、三日目の砂浜をいつま

も歩かれました。
波打際に残した私の足跡を一つ一つ
辿りながら、アリランを合唱する女学
生たちの声を背中に受けて、そのムード
に酔いました。

韓国には、「人の情け」というものは、
入ってくる時にはわからないが、出
て行くときにはよくわかる。」という
言葉があるそうです。全くその通り
で、一足先に Seoul へ戻る私を送っ
てくれた女学生たちは、涙をためてい
つまでもハンカチを振っていました。

隣りの国でありながら、案外知られ
ていない韓国の、その秘境というより
も孤島での四日間は、とても楽しいも
のでした。

その他のことは、いろいろと善障り
もあるので、帰国後、御報告いたしま
すが、元気で韓国の旅を続けていま
す。他事ながら御放棄下さい。

一九六七年八月十六日
小方全弘

《最近入手したアンデスの本》

1) "The Andes are Prickly", by
Malcolm slessor, Victor Gollancz,
London, 1966 — "Red Peak"
を書いて一部の登山家から悪評を買っ
ているスレッサーが、今度はアンデス
の本で、毀誉相半ばの批判をうけてい
る。一九六四年に男女混成のスコット
ラン隊を率い、Veronica, Machu
Picchu, Yerupaja に行った時のこ
とが書かれている。

2) "Secret of the Andes, by Br
other Philip, Neville Spearman,
London, 1961.

三版も出ている。遠いインカ以前の
文明史。
3) "A Way to the Lands of the
Andes", by Albert J. Nevins, Whi
combe & Tombs, London, 1964.
(吉沢)

蔵王清溪小屋の記

横田 敏一

(二二五)

蔵王山の二高清溪小屋は昭和十一年九月に建設され昨秋三十周年を迎えた。当時の山の仲間たちが集まり、ささやかなお祝いをしようと思つたところ、東北大山の会では左衛門小屋の十五周年も兼ねて春の残雪期に特別総会を開催する計画を立てていたので、合流することにした。

特別総会はこの五月二十七日、峨々温泉において開かれた。北大佐々保雄教授（昭和二年二高卒）の「北米・カナダ・アラスカ山の旅」、東郷大色川大吉教授（昭和十八年卒）の「明治ナショナルリズムの発展と近代アルビニズムの黎明」という二つの特別講演のあと、懇親会に移り、清溪小屋建設当時の二高山岳部長志賀伸輔先生（東北大名譽教授）、栃木県農業試験所所長黒崎大吉氏（大正十三年卒）、東北大伊東信雄教授（昭和三年卒）のほかに諸氏がこもも立って小屋建設の苦心談を披露された。総会では先輩と東北大山岳部員交歓のコースのうちに午前一時ごろ散会となった。翌二十八日は清溪小屋へピクニックを行なったが、佐々、伊東両氏は夫人を同伴し、一同残雪の雪解け水でどろんことなつた道をたどって、なつかしい清溪小屋の前に立ったときは、往時を思い感慨無量であった。

二高山岳部は、大正三年石川欣一、中上川小六郎両氏により創設された二高山岳会が、大正十一年に正式の部として認められてできたものである。そのころの山岳部は夏山専門で、スキーの愛好者は有志のスキー部を作っていたが、いつとはなくスキー部は山

岳部と一つになったようである。黒崎大吉氏はスキー部のリーダー格であつたが、大正十一年の冬、スキー仲間たちと北海道青山温泉の北大スキー合宿に参加してから、二高生の間にスキーを普及させることを考え、翌十二年春峨々温泉で初めてスキー合宿を行なつた。その後毎年峨々で合宿が行なわれ、黒崎氏は常連のように参加していたが、部員たちは峨々はゲレンデから遠すぎて不便であるとか、蔵王は刺激に乏しくスキー技術をみかぐの適当でないとかいった不平を述べるようになった。黒崎氏は上信越等のスキー場を見て回つた末、雪質、積雪量、環境などからやはり蔵王が最良であるという結論に達した。

昭和十年十二月峨々の合宿に黒崎氏や、同氏のスキー仲間磯村乙巳氏（大正十四年卒）が来合されたとき、峨々に代わるべき根拠地として小屋建設の話が出て、磯村氏が部長が建設後の小屋の維持に責任を持つなら建設資



金の一部を寄付しようという申し出があつた。このことがきつかけとなつて小屋建設の計画はにわか具体化し、翌十一年二月仙台の二高山岳会（山岳部設立以後OBの会を二高山岳会と呼ぶようになった）において建設が正式に決定された。

当時興銀総裁であつた結城豊太郎氏は二高出身であつた。だが、いよいよ出たが結城氏に寄付を頼もうということになったが、昭和二年は二高で同盟休校事件が起きた際結城氏が調停役の一人として尽力したので二高後輩の間に結城氏の名が印象づけられたものらしい。（なおこのとき学生側の先頭に立つて奔走したのは愛知揆一氏であつた）

結城氏に会つたのは現東大教授久野久氏（昭和四年卒）であるが、久野氏は結城氏から「故井上準之助氏（二高出身）から自分は五百円を預つてゐる。井上氏は何か有効に使つてくれといつてゐたことだから、これを小屋建設のために寄付しよう。その代わり、井上氏を記念する意味で、同氏の号である清溪の二字を小屋の名につけてくれなさい」と提案され、関係者一同に計つた結果御好意を受けることに決まつた。

井上、磯村両氏からの大口寄付のほか学生会である二高尚志会からも多額の補助金が出されることになり、建設資金は最初目標にした二千元をはるかに上回り三千元に達した。寄付者芳名録中に木暮理太郎氏の名も見えて、木暮氏は二高山岳会創設以前に卒業しているのだから山岳部に直接の関係はない。部員たちのほうで勝手な大先輩として尊敬していたのである。寄付は先輩の御厚情によつて

順調に集まつたが、小屋建設も黒崎大吉氏を中心としたスキー仲間の友情により着々と進んだ。小屋の設計には東大建築工学科の堀越三郎教授があつたが、同氏はつとに学習院や成蹊高校などの小屋の設計者として知られていた。黒崎氏がたまたま東大谷川寮にスキー行をこころみたまふとき堀越氏と出会い、同じ二高出身である奇遇に驚き、さうして蔵王の山小屋の設計を懇請したところ快諾を得たのであつた。堀越氏は全くの無報酬で引き受け、十一月六月には小屋建設地踏査のため山岳部長、部員らと共に蔵王に登つた。

小屋の敷地は国有林の中にあつた。黒崎氏のスキー仲間植田武彦氏（二高出身、農林省）は前に営林局関係の仕事をしていたので、小屋の建築材や燃料材の掘下げに進んであつたの労をとりまわつた。小屋の燃料のまき材が今日に至るまで確保されているのは植田氏の御尽力によるのである。

七月になって白石宮林署により実地検分測量が行なわれ、井戸沢南岸の段丘上の標高一、四三〇メートルの地点が建設場所と決められた。小屋は建坪十二・五坪の二階建て、半地下室は三坪の炊事場と九坪のまき置場からなつており、合計二十八坪、収容人員四十名であつて、建築用材は現地のアオモリトマツを使用した。工事を請け負つた山田工務所による見積りは二、一四九円三〇銭であるが、会計報告書によると小屋建設費二、一〇〇円、追加工事費八六四八八銭となつてゐる。

部員は夏期休暇に入ると共に、大黒天上の金沢（鳥の沢）にベースキャンプを張り、現場監督のため交替で泊り込んだ。七月中に用材の伐採が終わる、八月一日製板のエンジンの音が朝の静寂を破つて沢中にこだました。八月二十日蔵王の峰々が暮色に包まれたころ上棟式が行なわれ、ろうそくのと

もるデントの中で祝杯があげられた。九月十三日待望の山小屋が完成した。ベースキャンプで完成を見守つていた宮沢久雄氏（昭和九年卒）はうれしさのあまり即興的に「緑色濃きタンネの森に、立てるヒュッテ、待つよわれら、蔵王ハイル、バルクハイル」と歌つた。この歌はいまも東北大山岳部部歌として歌ひ継がれてゐる。

同月二十七日に現地で落成式の予定であつたが、あいにく荒天のため式は峨々温泉において挙行された。

いま清溪小屋の中に木暮理太郎氏の筆になる額が掲げられている。額といつても古材の上に「清溪小屋」と書いてあるだけのものであるが、これには次のようないきさつがある。志賀教授のあとを受けて山岳部長に就任した伊東信雄教授が結婚することになつて、部の有志一同でお祝いを贈つたのだが、少々お金があつたので上田勇五（昭和十六年卒）、野口義孝（昭和十七年卒）の両氏が相談して額の材を購入した。この材は昔多摩川にかけてあつた水車の板であるという。当時木暮氏は日本山岳会会長であつた。山岳会評議員の沼井鉄太郎氏もやはり二高出身で、沼井氏を通じて木暮氏に揮毫をお願いしたのである。板に白色水性塗料を塗つた上墨書したものを、野口氏が彫つて濃緑の塗料を入れたということであるが、二十数年の星霜のうちに色はあせて、古材の地はだが出てきた。小屋の環境も昔とはだいぶ異なり、有料道路（エコーライン）から小屋の赤い屋根がよく見える。建設当時のような山の静けさは求むべくもないが、清溪小屋がいつまでもその名のように清らかな谷間に立ってほしいものである。（一九六七年八月三日）



フランスにて

伊藤頌司

1967年
国際アルピニスト集会
に参加して

当時は近年にない好天とかで連日太陽がキラキラ輝き、各水河の雪も例年より少ないそうです。さて私共の参加致しました、一九六七年度の国際アルピニスト集会は一日(七月二十九日)盛会のうちに無事終了致しました。

感想と私共の行動概要を報告いたします。

各国の参加者をみますと、ヨーロッパ諸国の代表はやはりロッククライミングのエキスパート揃いで、彼等は五級六級のバリエーションルートを楽しんでおりました。

南米とインドの代表達には親善的な目的が強く、ケーブル等を利用しての観光的なコースが多いようでした。

私共は最も遠い国からの参加者ということもあり、各国代表から盛んな歓迎を受け、特にインドから参加していたエベレスト隊の隊長コリ氏、ダージリンの登山学校の校長クマール氏及びシムラバのゴンブ氏とは特に親しくなりました。

各国代表それぞれお国柄があり、食

事の時などは各国語入り混ってたいへん楽しく賑やかなものでした。私共も植村さん(私のバートナー)のフランス語と私のつたない英語でなんとか皆の仲間に入り、いつも人一倍の食欲を誇っておりました。

またフランス国立登山学校の校長ジャン・フランコ氏、プロフェッサーのコンタミニス氏、ジュリアン氏等からいつも心強い指導と援助を受け、各水河に散在するCAFの山小屋では小室の人々から温いもてなしを受けました。これは私共がカンク不足で子供っぽく見えたとはいえますが、とにかくCAFの各山小屋はすばらしい設備とすばらしい人々に守られてJACにもこんな小屋があればなあとつくづく感じました。

氷河と切り立った針峰と四千米の峰々、そのなかではぐくまれたシャモニの山頂達に山登りに対する情熱と厳しさ、そんなものに、それらの氷河や峰々に足を踏み入れた時、フト触れたような気がしました。

踏みたい頂き、登りたい岩壁はまだまだたくさんありました。しかし二〇日間はずっとアツという間に過ぎてしまいました。後髪を引かれる思いで私共はシャモニを離れました。また訪れる日のあることを願ひながら。

そして植村さんは昨日ジュネーブからグリーンランドへ向けて出発致しました。私は昨夜ツエルマットへ入りました。

夏のヨーロッパアルプスには、いろいろな日本人の登山者がきています。そしてあまり良くない評判ばかり耳にするのは何故でしょうか。私はある新聞社からたのまれて、これら日本人の登山者について記事を書くことになっていました。

しかし、今現実にはそれらの人々に会い、話を聞き、姿を見たとき、何故、

何のために彼等はこうしているのだらうと疑問をいだき、アルピニズム発祥の地にて、アルピニズムの何たるかをあらためて考えさせられ自分自身の考え方も確立しないまま記事を書くなどということは不可能であると判断いたしました。

〔行動概要〕

七月一日 国立スキー登山学校の門をくぐる。七月十一日 ブランドエギューヘケールで登り、ボゾン氷河を経てミューレ小屋へ入る。七月十二日 ボゾン氷河をつめモンブラン頂上へ、頂上よりモンモディを経、エギュードミディへ、ケールにて帰校。七月十三日 ケールでエギュードミディへ、イタリヤ側見物に出かける。七月十四日 電車でモンタンベールへ、メールダラスを登りクイベルク小屋へ入る。七月十五日 夜明け前、降雨のため、エギューベルトを変更し、モアヌ南壁へ向う。七月十六日 クイベルク小屋をあとにしタレーフル氷河に入りエギューベルトを目指す。取付予定のクロアールドウインバーは一日の雨のため状態悪く、従ってクロアール左側の岩壁へ取付き直登する。岩壁を登ること一〇時間、頂上まであと五〇米とせまるも、最終帰校時間を午後七時としてきたため、若しそれ迄に連絡をしないとヘリコプターが出動する間校校にフランク校長が言っていたことが気にかかり、涙をのんで引返す。登りに苦戦した雪まじりの岩壁は降りは一層滑しく午後八時半やっと小屋へ着き学校へ連絡をとり小屋へ泊る許可をもらう。七月十七日 ゆっくり起きて帰校。七月十八日 休養。七月

十九日 プレバンへ登り、対面のモンブラン山群を見物。七月二十日、フレイトデシャルモへ向う。前回参加して遭難死した君島氏と、この七月海水浴中に死された連絡を受けたM.A.C.小滝氏のためにケルンをつみ、花とタバコを供え追悼を行う。七月二十一日 コンタミニス氏の氷雪技術の講習を受ける。七月二十二日 夜半より雨、風も強くなる。ダンデジェアンをあきらめてケールで降りようとするも強風のためケールが止ってしまう。トボトボと氷河を伝ってモンタンベールへ下る。七月二十三日 シャモニの町中で、グランドジョラスを終えた高田光政氏に逢う。七月二十四日 バスにてルトワールへ向い、リフトで四百米かきアルベルト一世小屋へ入る。七月二十五日 悪天のため、エギュードミディの登頂ならず、帰校。七月二十六日 バスにてアルゼンチエの村へ向い、ケールにてグランドモンテへ、アルゼンチエ氷河を伝ってアルゼンチエ小屋へ入る。七月二十七日 トワールノール氷河をつめ、最後少しばかり岩場を登りトワールノールのピークを踏む。七月二十八日 小屋よりエギュードアルゼンチエへ向い、登頂後帰校。夜モリシエエルゾーク氏ほか出席してリセプションが開かれる。七月二十九日 集会終了。(以上)

◇ ◇ ◇

国際集会参加者
南アフリカ (Sherman Ripley, Brit-
ain Watz)
ドイツ (Fritz Zintl, Günter Stur-
m)

英国 (J.M.A. Boyson, N.J. Est-
court)
オーストリア (Walter Spitzenstät-
ter, Oti Wiedmann)
ベルギー (J.M. Gresse, Ed. Roses)
ポリアニア (Alfred Martinez Delga-

do)
ブルガリア (Athanas Kovandjiev,
Christo Prodano)
カナダ (Brian Greenwood)
スペイン (José Aranda Llatas, En-
rique Torres Ochoa)
フィンランド (Torkel Althman)
オランダ (Ewout Reijnerse, Frits
Mansvelt Beck)
インド (N. Kumar, Nawang Gom-
bu, M.S. Kohli)
イラン (Dajili Katbeij)
イタリア (Angelo Pizzocolo, Rob-
erto Sorgato)
日本 (植村直己、伊藤頌司)
メキシコ (Miguel Figueroa, Mario
Sanchez Sea)
ノルウェー (Dag Dawes, Erik Bo-
elike)
ポーランド (Maciej Kozlowski, Ja-
nusz Kuroczab)
スウェーデン (Hans Hellström, B-
engt Hansson)
スイス (Walter Weibel, Peter Ar-
igoni)
チェコスロバキア (Ceslav Wojcik,
Ludovic Zahoransky)
連 (Vlacheslav Onichtchenko,
Kerjany)
アメリカ (Henry L. Abrons)
ネーホルスラヴ (Tone Skarja, Ja-
nez Ursic)
フランス (Contamine André, Gic-
quel Maurice, Julien Pierre, Pa-
yot Georges)
(以上二五カ国、四八名)

(編者注: この一覧表を見ておどろいたのは、ポリアニアからアルフレッド・マルティネス・デルハドが参加していることであつた。彼は一九六一年のわれわれのアポロバン登山にも参加し、他の隊にも時々顔を出している小男である。)

予報
と
便り◆日印合同
婦人ヒマ
ラヤ登山
◆について

婦人懇談会

この度インド婦人との合同ヒマラヤ登山にインド Indian Mountaineering Foundation of Kohli氏から三田副会長宛に書状をいただきました。



この計画は一九六五年同氏より三田副会長宛に提案があり、旧東京支部婦人部が準備を進めておりましたが、インド・パキスタン間の紛争のため一時中止の止むなきに至っていたものであります。

今回の入山可能な地域は Himachal Pradesh、時期が一九六八年春以降となっております。

婦人懇談会ではとりあえずこの問題を検討すべく旧婦人部のメンバーにはかつて準備をはじめましたが、八月三日本会理事会において三田副会長が委員長を引き受けられ、委員会および事務局を組織してこの計画を推進進めることになりました。

活動の範囲を拡大したいと思いますので上記合同登山の問題と併せて皆様のお考えをお寄せいただきたいと思います。もちろん男性会員のご意見も歓迎します。計画内容は次の通りです。

登山期間 一九六八年春 三月中旬～六月中旬

場所 Himachal Pradesh
Kalash Peak 他

人員 日印各四～五名
(医師一名派遣)

費用 一人六十万円 自己負担
尚メンバーは九月下旬～十月上旬、委員会が決定します。

この計画に興味をお持ちの方、参加希望の方は山岳会ルーム婦人懇談会宛できるだけ早くご連絡下さるようお願いいたします。

第10回・紅葉会通知

期日 11月11日(土)・12日
於 南ア南麓、梅ヶ島温泉・泊 第二日行動解散地まで一切の経費、二四〇〇円也。

本年は紅葉会第十年目です。盛大に行ないます。十年出席者には努力賞を、参加者の拍手のうちに贈りたいと思います。今のところ三名の候補者があります。

昔からの梅ヶ島温泉は、武田、今川の戦国時代からの湯です。第一夜は懇談会の後、美女を作ると言われている温泉に湧り、翌日は、

A 八紘嶺から七面山
B 安倍峠から身延
C 八紘嶺から大谷崩
D 安倍峠から刈安峠
E 八紘嶺往復
F 温泉に沈殿組

の六班を編成、それぞれに地元会員が案内致します。参加御希望の方は早目に静岡支部宛お申込み願います。

集合は、11日午後1時、静岡駅集合予定地。

◆ ◆ ◆
梓会御案内

梓会の昭和四十二年恒例行事を次の通り行ないます。万障お差支りご参加下さい。ご家族も大いに歓迎致します。

一、第三回ハイキング(9月10日)

A 御岳、大橋峠、水川

B 鳩の巣、大橋峠、水川

二、第六回懇親会(右同日)

水川町三國屋旅館

講演者 田部重治

村井米子

山下夫

防大合宿訓練スライド

会費 一〇〇〇円

三、その他、連絡先

東京都大田区桐里町一五七

茶谷東海

電話(753) 0173

N・Z・便り

秋田しおみ

山に雨が降ってスキー場の雪がとけたり、真冬だというのに南島の天気はおかしいようです。でも Christchurchの街はさすがに寒く、毎朝通る公園の池は凍っていますし、芝は霜でまっしろです。自転車で風を切ると顔が凍ってしまいそうです。

今週からお金の単位が変わりました。オーストラリアと同じく、ドルに切替ったわけですが、今どく、ドルに切替ミックスしてやこしい状態です。

Harcleさんは十月十五日、八人のパーティで南極へ山登りにいらっしゃいます。Peterは試験の最中なのでまだはつきり決めていません。

先週末、Peterと念願の Rolllestonに登りました。天気も雪の状態も最高によく、クランボンの快適にきく山行でした。ルートは Oira Slides を登り、Low Peak から Middle Peak をトラバースして High Peak に達するもので、雪の岩登りに十分満足しました。月末には John Conner が Temple へ登ろうと云っているのので楽しみです。八月には大学のスキー・スクールへ行く予定です。

今日山岳会のミーティングで、Harcle やんはじめ Cawley さん、Bey, Margaret など大勢の方に会いました。Bey が、お姉ちゃまから送られた写真を見せてくれたのでつかしかつた。

あと六週間。Cook area に何とかして行きたいけれど、Tasman まで行くひまのある人はなかなかいません。せめて Arthur's Pass の山々の写真だけでも沢山撮って行くことにします。何卒皆さんによりしくお伝え下さい。

(七月十三日付 山口宛)

秋田さんは八月三十一日 N・Z を発ち、三カ月をオーストラリアで過ごして十一月末帰国の予定です。

今夏も会社の人達のお伴をして夏の山へ登って来た。一昨年は信州の蓼科山(二五三〇m)に登り、昨年は寸又峽に行つて顔を出し、今年は二五七八m の日光奥白根岳の頂上に立った。

八月五日(土)に東武浅草から快的な電車に乗って日光駅に降りたが、何十年前とさっぱり変っていない。

いろは坂の舗装道路も田舎者には驚異であった。この方は余りに変り過ぎている。湯元について「山の家」に入

◆奥白根に登る◆

吉沢 一郎

頂上から降る途中、携帯ラジオをガンガン鳴らして二組に会った。君達は何のために山へ来たのか、そんなことをしているのは、自分達のフーテを自分の費用で宣伝しているようなものだ、やめ給え、と嗚鳴りつけた。

二組とも大人しく、済みません、とスウィッチを切る。案外素直だったのはこちらの人が拍子抜けで空回り。

あとで写真を見せてもらったら、私は寝ているところばかり。マイ・ペースで一〇時間「山の家」へついた時にはもう何をやるのも嫌だった。

る。この日はトレーニングのつもりで金精峠まで歩いて往復したが、人間の通る道はえらい虐待である。

六日の日曜に総勢一人(男五人、女六人)で奥白根を目指す。昭和十八年頃と覚えていたが、冠さん、西堀氏その他の人々と冬の前白根にスキーで登ったことがある。あの時、吹雪の頂上で、塚本閣治氏がフィルムの入替えをやるのを見て、流石は専門家と感心したが、あれから二十四年、その塚本氏もういない。

奥日光には色々の思い出が多い。仲のよかった法政の田中菅雄と西湖の畔りでキャンプしたこともある。一人で男体へ登った時、角の立派な鹿と正面衝突したり、雉をしめている蛇をビッセルでひっぱたき、蛇の上前をはねたこともある。法にひっかかるかどうかは知らないが、もう時効だろう。

今年は天気がよかったので登るに従って方々の山が見えて来た。雉は直ぐわかったが、至仏が近いはずなのにさっぱりわからぬ。あとで「山の家」へ来てくれた栃木岳連の阿部さんに聞いたら、あれは判り悪いと言っていた。奥白根の頂上近くに、五〇mばかりいやなところがある。街道筋なので老若男女の登り降りが賑やかだが、よく遭難事件が起らないものだ。

頂上から降る途中、携帯ラジオをガンガン鳴らして二組に会った。君達は何のために山へ来たのか、そんなことをしているのは、自分達のフーテを自分の費用で宣伝しているようなものだ、やめ給え、と嗚鳴りつけた。

二組とも大人しく、済みません、とスウィッチを切る。案外素直だったのはこちらの人が拍子抜けで空回り。

あとで写真を見せてもらったら、私は寝ているところばかり。マイ・ペースで一〇時間「山の家」へついた時にはもう何をやるのも嫌だった。

☆ Cordillera Blanca ☆

◇ サンタ・クルス・ノルテ登頂 ◇

七月二七日

御無沙汰いたしました。私達のベール・アンデスでの登山も終りに近づきました。サンタ・クルス・ノルテのC2から書いています。

七月二四日、処女峰サンタ・クルス・ノルテに登頂成功しました。登頂メンバーは林竹彦をリーダーに、西野光昭、小林一智、宮下昭の四隊員です。

チャ湖畔にBCを設営しましたが、隊員の大半が風邪で倒れ、また、ワシンの疲れが出て、行動がストップしてしまいました。

サンタ・クルス・ノルテ西面の氷河はクレパスが多く、西稜の末端は湖畔で、穂高の屏風岩の三倍位の大岩壁と



なり、サンタ・クルス・ノルテへ近づくとルートの発見に苦労させられました。しかし動ける隊員のみにてクリコチャの左岸をトラバース、更にラフ・コチャの右岸の水辺をトラバースして氷河の末端に出て、氷河とモレーンの間を登って、上部氷河へ出ることに成功。七月一八日、西壁直下にC2を作りました。

私達はアメリカ人のL・オーテンバーガーから贈られたサンタ・クルス・ノルテの写真資料により、東面は岩壁が多く、登攀不可能と考え、クリコチャ側の西面からの攻撃を計画しました。しかしL・オーテンバーガーのアドバイスでは、西面からまず不可能とのこと。私達は唯一の可能性をその西稜に求めてやってきました。しかし写真と実物ではやはり大違いでした。西稜は薔薇根の上、苔雪の連続で、全く手がつかれませんでした。クリラフとのコルからのルートも考えましたが、稜線直下にクレパスが横に走り、行き詰ってしまいました。

頂上への攻撃がストップしたまま、C2への補給は続けられ、登頂準備は整いました。そこで新しいルートとして、そのヒマラヤ壁に被われた西壁の直登登攀を考えました。

頂上直下の岩壁を避けて西稜へ出るとして、四〇〇mの登攀です。直ぐ氷河の中のフィックスに使ったスノーバールを回収、傾斜六〇〜七〇度の西壁への攻撃が始まりました。

二〇日、二一日と二日間フィックスを完了、二二日は風雪になり、約一〇センチの積雪。二三日快晴の中、前記四名のアタック隊が出発しました。二三日は四〇〇mの西壁を登り、西稜上に出てビバーク、二四日、西稜の茸雪を次々と直上して、一二時四五分四〇秒、サンタ・クルス・ノルテ、五八二九mの頂上に立ちました。頂上へ

一六ミリ・ムービー・カメラを持ち上げて、記録映画のクライマックスを撮影しました。

下降に手間どり、再び西稜上にてビバーク、二五日強風の中、C2へ下降しました。三〇日にはBCへ集結、サンタ・クルス周辺の五二〇〇〜五四〇〇m位の無名の処女峰三〇四座に登り、八月はじめ、ワラスに向けキャラバンの予定で。

リマに出て休養の後、まだ日本隊の入らない、ラウア山群に入り、ネバド・Cachon等の試登を行ないました。又別隊はワイタバーヤ山群、ヤウヨス山群等へ入り、写真資料を作る予定です。

今年のペルー・アンデスは天候不順で、強風や雨、雪におそわれて苦勞しました。

ワスカランではアメリカ隊の二名がクレパスに落ちて遭難しています。チリ隊がビスコヘ、フランス隊がアルパヨ、スペインがChimney Chico (チンチエイの肩にある五九〇〇mの鋭いピークのこと)へ。アダムス・カーターのアメリカ、アルゼンチン、イタリー合同隊がカシャン・オエステへ、などが、今年のブラシカの主な登山隊です。

今年はブラシカは少なく、ポーターが大部あふれていました。ワラスのブラサでよく、ポーターに使ってくれと話しかけてくるインディオにあいまして。

わたし達はサンタ・クルス・ノルテでは、新しいポーターに、オノラート・カルドフ・フロレス(33)を使いました。南アメリカ隊とヒリシヤンカ、メキシコ隊とイエルーババー、ヒリシヤンカへ行った経験があり、よく働らくいい男です。今後もっと日本隊が利用してもいいでしょう。

八月下旬、メキシコ、アメリカ、アンカレッジを廻り帰国の予定です。アメリカでは、L・オーテンバンガーにあうことになっていきます。

今回はいろいろお世話になりました。私達は十分にアンデス登山を楽しみ成果をあげることが出来ました。皆様によりよくお伝え下さい。

七・二七 副隊長

横地康生

(吉沢一郎宛)

◇ ◇ ◇

追信
帰国して
横地康生

残暑お見舞い申し上げます。

八月二六日、帰国しました。もっとゆくりしたかったのですが、金がなく残念でした。帰路私はアラスカへ廻り、アラスカの山につき、資料を集めて来ました。いい山があります。一、二年中に、会の若い連中と出かけるようにしたいと思います。

さて過日は祝電ありがとうございました。サンタ・クルス・ノルテについては、クスコであったアメリカ隊からのお祝いをいただきましたが、予想以上に褒められました。

主峰に比べると少々小さいのが残念でしたが、山容といい、スケールといい、十分に満足できる登山ができました。16ミリの頂上まで上げましたので、映画のできるのが楽しみです。

吉沢さん達のブカヒルカも遠望しました。いい山ですね。その写真、できましたらお贈りしたいと思っています。

さて、今年の「山岳」発行されたと思いますが、ぜひ入手したく思います。吉沢さんにお願ひしてもダメなら販売先をご指示下さい。又、会報の「山」も、四月以降入手

していませんので、お送り頂ければ幸いです。落着きましたら写真やスライドを持ってご報告に参上します。

ペルーのセザール・モラレス氏がよろしく、とのことでした。又、ワラスの谷川さんもよろしくとのことでした。ブカヒルカの写真、食堂の壁にかかっていました。吉沢さんのサイン、私は懐しく谷川さんの宅で拝見しました。私達も今回非常にお世話になりました。

吉沢さんは、アンデスへゴルフの用具一式をもつて来られたとか、金のあふる隊だと、私達が余りピンポイントで、引き合いに出されて困りました。今回最も欲しかったのはゴムボートでした。吉沢さん達のゴムボートは、有効だったときいています。湖面を見下ろしながら、アルパヨ街道を毎日ボカしました。ボートがあればダイレクトに行けるのに、悔みましたが、アダムス・カーターとはケブラダ・ラフォルタで一日がいがいですれ違い、会えませんでした。ワラスでも同じく一日がいがいで会えませんでした。

彼の狙ったCachan Oestは、今年も隔ちなかったようです。いい山です。農工大のヒリシヤンカは、よくやりました。ビバークの連続だったとか。リマでホテルが一緒でした。今、ペロニカへ行っています。

以上簡単な報告とお願いまで。

◇何の反応もなし◇

「山」二六四号(六月号)に、沖電気芝浦山岳部の「遭難者捜索についてお願い」というのを、多少のお手助けにもと載せたが、その後、二名の行方不明者がどうなっているかについての連絡が何もない。同山岳部からもなし、第三者からもなし。誰か御存知の方はありますか。

(吉沢)


 富士山
H.T.

図書紹介

「ネパール・ヒマラヤ探検記録」
ネパールと日本一八九九―一九
六六・編・日高信六郎、本文・
川喜田二郎

日本ネパール文化協会は、余りに知られぬ会である。一九六四年創立。この本の母型である「日本とネパールの間の文化交流原典」が、英文で出版されると案内をうけたときは、どきりとした。そのソース・ブックという面影は、本書の後半に収められている。なぜ日ネ協会が生れたか、協会は何かをするのか。現実の姿を、遠く河口師から、説きすめる。(一)「ネパールと日本」は、ネパールに注目する諸君に、ぜひ心読してもらいたい。(二)「開拓者たち」(三)「登山オリビック」になる、川喜田さんの筆は流暢に進み、一気に読ませる。だが(14)の「問題と展望」では、真綿で首をしめている。まだ少し甘い。(四)「旅行者・漂泊者たち」登山ほど目立たない人々に、(五)「学術調査」では民族研究が光り、この方面の努力がしのばれると同時に、(六)「技術援助」は、登山関係者が見落しがりな面影を、ありのままにくり出し、まだまだ活動か研究か調査、援助の至らなさを呈示している。もちろん、それだからこそ、協会専務理事、川喜田さんが熱情をこ

めて書きあげられたことがうかがえる。

巻末の資料は、三種のカード調査を協会が手分けして、足で探訪して作りあげたもの。チーム別カードを整理したものであるが、個人別のもももられている。もしこれだけのものを個人がやるとすれば、まず不可能であろう。もちろん、本書にもられたものは、その一部分であり、ソース・カードは、さらに詳細なものであろう。

巻末の地図「日本人踏査路、一八九九―一九六六・三」は、トレースが赤線で示され、よくも歩いたものという感が深い。写真はカラー8、白黒25、ネパールを知るには、座右におくべき本である。英文ならば、識者をうならせよう。川喜田さんと協力者に感謝したい。定価(六八〇円)も安い。(講談社刊、四二年四月、二五九八二頁)(田中栄蔵)



第十回

有志閑談会の記

古沢 肇

有志閑談会も早いもので、第十回を迎える清水谷皆香園の懇談会を復活させたもので、最初は「清水谷皆香園をしのぶ会」として再発足したと覚えている。この辺のことは発起人の一人神谷さんが詳しい。幸いなことに会場として名園六義園内の心泉亭という格

好の場所を得てから好評を博し、いまや会の年中行事の一つとなつてしまつた。

今年六月二十四日も夕刻前会場へ急ぐと、すでに長老方がだいぶお揃いである。これはと恐縮してご挨拶など申上げているうちに、毎年のように庭の芝生の巨石の傍で揃って記念撮影が行なわれる。折から庭一面の深緑が夕陽に映えて美しい。去年も一昨年もの通りだったと思う。恐らく来年もそうだろう。「歳々年々人同じ」であることはなによりもめでたいことである。三万坪の庭に九千坪の池、三千二百八十九本の木々(事務所調べ)の緑を瞬時の間とは言え、わずか三十数人で独占する気分はやはり根岸候なみのぜいたくである。

ついては会にはじまる。その間にどんな話があったか、くわしくは書ききれないが、耳に残ったものからすこし書きとめると、近藤さんは佐伯平蔵との思い出を、田部さんは八十歳を越えて登った最近



の奥秩父の山登りを、深田さんは伊吹山での珍らしい失敗談を話された。静岡の山本朋さんは厳君の例を引いて、長寿と山との関係を、またこの夏カナダへ行かれる今井さん夫妻は、キャラバンに備えて、夫人が連日馬事公苑で乗馬の稽古をしている話があつてこれは楽しかった。松方会長や現役の理事さんからは、会の新しいルームの構想や、募金についての依頼もあった。時々話が現実の引き戻される。その時節柄止むを得ないことだった。最後に藤島さんから、このような会合に武田久吉先輩がお見えでないのは淋しいから、今後はぜひ出席していただくようにと積極的をお願い

をしたら、とのご意見が出て一同共鳴した。かくて定刻八時、名残りが惜しまれて容易に散会とならず、閉会が告げられてから駆け込んだ運参組の小野さんとなお四、五人が女中さんから掃き出されるようにして表へ出たのは大方九時に近かった。その顔ぶれは今年また南極へ行く村山さん、それから関根さん、山崎さんらで最後までにかやなことであった。

当日の幹事佐藤久一朗、坂倉登喜子、松田雄一の各氏。なお明年度の幹事は成瀬岩雄、渡辺公平、川森左智子の各氏である。(古沢 肇記)

◇当日の参会者(順不同)

松方三郎、川森左智子、山下一夫、関根吉郎、成瀬岩雄、鶴岡元之助、織内信彦、桜井信雄、松田雄一、藤井運平、佐藤隆太郎、野口末延、岩永信雄、藤島敏男、田部重治、近藤茂吉、神谷恭麻生武治、牧野衛、深田久弥、網蔵志郎、古沢肇、松本熊次郎、足立源一郎、山崎金次郎、今井雄二、中村謙、山本朋三郎、飯野亨、辰沼広吉、佐藤久一朗、今井喜美子、坂倉登喜子、村山雅美、瀬名貝利、小野利次、山崎安治、交野武一。(以上三十八名)

◇「山」二六六号御郵送、正に落筆、お手数を謝します。八月中頃から急性膀胱炎にて倒れ、いま静養中です。ひどい夏バテですが、お蔭で快癒に向いつつあります。

駄句六句……………

・グリーセード潤沢走るや晩夏光
・月日すぐ涼しく香る浦島草
・林道の水場を通り湯を医す
・岩岸に代りて石山眺めよき
・美しや岩岸なきも景一位
・奥多摩に父の手土産山葵漬

(二〇三三)
水田健之輔



熊本支部

十周年記念山行に
参加して

藤井 運平

七月二十三日(日)

熊本県南部の宮崎県境に近い人吉盆地の東端に湯前線の終点湯前駅がある。湯前より更にバスで約二十分、市房山の湖畔を辿り、市房山麓のひらけたゆるい傾斜地(約三六〇米)に在る湯山の温泉宿へ着いたのは午後二時半頃であった。

この日九州は曇一つない快晴に恵まれ、熊本地方では梅雨あけ後初めての晴天のことであった。さすがに暑かったが、涼しい風が吹いていたので助かった。

記念山行の市房山(一七二二米)を始め宮崎県境の山波は緑一色に包まれ、余りにもくっきりと姿を見せていたので、何か物足りなさを感じられる。夕方から催された総会に集まられた会員は、三谷支部長他七名であったが、支部会員数二十名で何時も集りのよい支部も今回ははかき入れ時の商用、出張等で止むを得ない不参加が多かったとのこと、会員は熊本市を中心として、大牟田、荒尾、竹田の各市、宮崎県高千穂町在住の方々であるが、指導者層の集りとして、クラブライフを楽しんでおられる、実に和やかな支部であることを感じた。席上七月の支部長会議での概要をお話したが、熊本支部は北田

正三氏が県岳連を設立以来、クラブと連盟との関係を明確にされ、熊本市在住の会員も、今年三十五周年を迎え、会員二千名を数える熊本アルコウ会の主な方々であり、他会員もその地方の指導者層なので協会、指導員制度等の問題についても余り問題がないように見受けられた。と云うのは熊じょうちゅうの故か、折角の機会に肝心の支部の方々からの御意見を伺い損ねた次第誠に申し訳なく思っている。

翌二十四日(月)は未明よりまことに爽やかな朝を迎えたのだが、八時宿を出る頃には、市房山は中腹以上雲に包まれていた。台風10号が北上しているそうである。進路によっては台風影響地帯である宮崎県境も多分の影響が予想される。

登山口より四合目に在る市房神社迄の参道は、うっそうたる杉の巨木(大きいのは周囲八米)の並木が続き、道は階段登りに上っている。樹木も南九州が始めての私にはめあたらしく、杉の巨木にまじって百日紅の太木のようなアカシヤ、サカキの太木、又私が愛用のスキーの原木であるイチイカシの巨木等初めて見ることができた。参道は昔のままで手を入れてなく、巨木続きの原生林は何か高温多湿の南であることを感じさせるものがある。

天候は市房神社へ辿りつく前から雨となっていたが、冷たい風が吹いて雨の身体には快い登りであった。市房神社は無人の社であるが御所車の紋どころも珍しい感じである。神社の裏手からの登山道は険しく、やせたひだ尾根の樹根を巻いて急昇している。雨は小雨となったが登るにつれて風が強くなってきた。ひだ尾根から表尾根へ移ってからは傾斜がゆるくなり、雑木の樹林帯を抜け、明るい一寸した岩まじりの平場へ出たら其処が頂上であった。時刻は十一時半、三時間半の登り

である。小雨も霧となったが相変ず眺望はきかない。県境となっている稜線の北方は、巨岩の激しい起伏が続いており、熊本県側は相当落ち込んだ断崖となっている。雑木におおわれている岩場に、木ツヅグの花がわずかに明るさを添えていた。宮崎県側より相変ず強い風が吹いていたが、雑木にさえぎられておいてお蔭で、ゆっくり中食をとることができた。

南方の稜線は雑木と笹の繁った傾斜面が低く落ち込んでいて、下は見えないが宮崎県側最奥の西米良村から一番奥な登山道となっているそうである。宮崎県側の山や谷は深いので未踏のところが多いためである。

登った道を下り二時間、登山口に着いたときには、山麓は晴天であった。行程中三谷支部長に従って歩いたが、今年七〇歳を迎えられた方とも思えずその健脚ぶりには、久しぶりの山登りであえいでいる私は顔色なしであった。

◎六月定例海外連絡委員会

▽日時 六月十六日(金)午後六時三〇分
▽場所 本会本会館
▽出席者 日高田村(俊)、牧野(文)芳野、小味、堀川、松田、関口

▽議事

①コロラド山岳会来日の件
七月七日来日予定、七月八日に本会本会館にて交歓会を行う。

②シユラ・クラブ来日(一九六九年)の件
他の機関、例えば国立公園協会等とも相談して返事を出すことにする。

③U・I・A・A総会開催の件
十月六日よりマドリッドで開催される本年度総会に吉沢一郎委員長が非公式に招待されている。この機会に日本側の同連合への加盟の態度を如何するか(本会が入るか、協会が入るか)を理事会にはかることにする。

④海外宛本会本会館移転通知送付方法検討。

⑤ネパール国元外務次官マナンダー氏来日の件
米国よりの帰国途上、去る六月六日、四日間滞在した。(詳細二六六号一五頁参照)

⑥台湾における登山許可申請の件
従来受入側での事務を行っていたのは台湾省山岳協会のみであったが、最近中国青年登山協会でも扱っている模様である。

⑦群馬県谷川岳登山条例英訳文の件
群馬県当局より同条例の英訳文が山岳協会を通じて送達された。

⑧アラスカ及びスイスに於ける遭難に関する報告
以上(関口)

集會委員会

▽日時 七月三日(月) 後六・三〇
▽場所 本会本会館
▽出席者 松本、松田、金坂、山崎、今井、大塚、西丸、宮下、広谷、武田、関口

▽議事
1、本年度の事業としては、大会(二回)、小集會(十二月を除く毎月第二水曜に開催)を行い、各支部の現地小集會並びに他の集會の開催に当たっては、重複を極力、避けるため各支部または他の委員会との連絡を密接に行う。

2、小集會は、原則として本会集會室で行う。

3、小集會(向う三カ月間)。八月二三日第三四回「山の怪談・怪異を語る会」西丸義哉氏ほか、九月二七日第三五回「海外遠征報告」講演者未定、一〇月二五日第二三七回「雪崩に関するシンポジウム」指導委員会

4、小集會は、原則として本会集會場で行なう。十一月の第四水曜は祝祭日に続くので、他の日に変更する。十二月は年末のため中止する。

5、委員会の運営方針が決定すれば、毎月委員会を開催する必要がある。毎月の集會の実行は、常任委員会が行なうこととし、大塚博美、松田雄一、中 保、堀川英司郎、木野樺、鈴木郭也、関口周也 以上(関口周也)

◇一橋大学ヒンズー・クシュ隊の成果速報◇

(6・27) チトラルからキヤラパン。
(7・4) ロシユ・ゴル水河上にBC建設(四〇〇〇m)。
(7・8) 飯C I建設(四六〇〇m)。
(7・9) C I建設(五四〇〇m)。
(7・12) C Iから上部ルンゼの偵察中、池知、落石に遭って左大腿部骨折。
(7・15) 池知をBCに収容、後帰国。
(7・23) サラグラール峰攻撃中断、倉知敏、佐藤之敏、原博員の四名が、ウドレン・ゾーム南稜上のC I建設(五一〇〇m)。
(7・28) C2建設(五六〇〇m)。
(8・4) 五時発、四・四〇pm、無名峰(約六六〇〇m)登頂。頂上直下にピナーク。
(8・5) 四時pm、C2帰着。
(8・6) C I帰着。
(8・10) ウドレン・ゾーム南峰(七〇五〇m)を目指し、六〇〇〇mの岩棚にC3。
(8・11) 六時発、一時半pm登頂。六時一〇分C I帰着。
(8・12) BC。
(8・20) C I。
(8・22) H・C(六五〇〇m)。
(8・23) ピナーク(七一〇〇m)。
(8・24) 九時am、佐藤之敏、原博員サラグラール南峰(七三五〇m)登頂に成功する。(吉沢)

あなたのネガから パネル張り

山岳写真を

ありし日の、苦斗と歓喜をいまここに

35 mm からすばらしい迫力!

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。

代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部

■全紙半分.....	パネル張り	至 1,200
■全紙(新聞1ページ大).....	パネル張り	至 1,600
■全紙2倍.....	パネル張り	至 4,000

カラーの部(ネガ、カラーに限ります)

■四切.....	パネル張り	至 1,500
■半切.....	パネル張り	至 3,000
■全紙.....	パネル張り	至 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下されば、別にお見積申し上げます。



優れた技術とハイセンスの

カタログ進呈

本多写真

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

ルーム日誌(42年7月)

3日(月) 集会委員会
ルーム委員会
4日(火) ルーム基金募金委員会
図書委員会
5日(水) 常務理事会
指導委員会
6日(木) 定例理事評議員会
8日(土) コロラド山岳会交歓会
11日(火) 学生部委員会
14日(金) 常務理事会

15日(土) 集会委員会
支部長会議
17日(月) 山岳編集委員会
18日(火) 図書委員会
医療連絡会
19日(水) 婦人懇談会
21日(金) 海外連絡委員会
25日(火) 指導委員会
図書委員会
26日(水) ルーム基金募金委員会
常務理事会
以上

編集後記
「会務報告」のカットを
又、佐藤久さんが書いてく
れた。御多用中済みません
でした。そろそろ新人? の原稿が来
るようになった。紀行文でも何でもよ
ろしい、遠慮なく送って頂きたい。や
っと涼しくなったので、今の遅れはそ
のうちに取戻します。(吉沢一郎)

昭和四十二年度
「山」会報編集委員の顔振れ
編集代表
吉沢一郎
松田雄一
小宮方秀
坂内通弘
酒本矩雄
井敏祥
明

昭和四十二年九月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三二二三 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
頒価五十円 (233) 七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂